第１回：茶道人

会長　田中 仙堂

「ご趣味は？」という質問が、よく知らない相手との会話のきっかけに使われるように、多かれ少なかれ、趣味はその人の一部であると見なされていると言っても、過言ではないでしょう。例えば、ゴルフは紳士のスポーツと言います。しかし、現在、ゴルフを楽しんでいる人は、紳士になるためにゴルフを行っているわけではありません。

茶を学び始める動機も様々であると思います。我慢しているとお菓子が食べられる唯一の課外活動であったからという方から、外国に行って日本の文化について質問されて困ったからと、その動機にも随分幅があるのではないでしょうか。はじめから、自宅で茶事を催したいと、志望する方は少数派で、点て方は習わなくても、茶席で恥をかかない飲み方だけを教えて欲しいという人も少なくありません。このように茶を学びたいというきっかけは人それぞれなのです。

そこで、“茶道人”であるのかないのかを分ける基準がどこにあるのか、ということを考えると、どこまで茶道の技術や知識を知っているのか、というところに求めても見つかりません。いくら、術や知識を持っていても、それが“職業的に必要な技能だから身につけたのであって、職業と関係なくなったら無用の物だ”、と考える茶人がいたとしたら、その人は、“茶道人”ではありません。一方、技術や知識は未熟でも、茶道と関わることによって自分の人生を充実させていくことができると確信を持っている人は、立派な“茶道人”ということができる、と考えています。

“あの先生のようになりたい”と憧れて茶を習い始めた、という話を聞くとうれしくなります。その先生は、単に技術や知識が優れているだけではなく、“茶道人”としての志を持っているから、見知らぬ人を惹きつけているのでしょう。

“お茶と関わっていたことによって、人生が充実している”と思える時こそが、“茶道人”であることの本当の幸せを実感する時なのです。

平成 24 年 05 月発行　会報「えんじゅ 71 号」掲載